

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 15 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2011

課題番号：20520074

研究課題名(和文) 占領期・占領空間における戦争の文化的記憶に関する実証的研究

研究課題名(英文) Tangled Memories on Occupied Japan

研究代表者

長 志珠絵 (Osa Shizue)

神戸大学・大学院国際文化学研究所・教授

研究者番号：30271399

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：占領期 戦争の記憶

1. 研究計画の概要

本研究は、近年思想文化論研究の領域で盛んに議論される文化的記憶論を占領期の戦争死者認識に焦点をあてて明らかにする。本研究は、思想史の理論としては、近年の米国及び東アジア地域での戦争の記憶に関わる文化理論研究の動向をふまえ、また実証研究レベルでは、日本で近年、飛躍的に進んだ占領期の史料データベースや新規の公開整理史料、米軍・日本政府史料・戦後直後の県庁文書・地域史料等、位相の異なる史料を横断的に用いた実証研究を遂行する。本土占領期と軍政下沖縄等、占領空間も射程に入れる。占領期の文化思想史研究として資料発掘を伴った認識対象を示すとともに、戦後文化史思想史研究にとっての戦争と戦後の連続性や占領期のもつ意味を明らかにする基礎作業である。

2. 研究の進捗状況

(1) 本研究の方法的特徴は、占領軍によるレコード的な性格をもつ英語史料(国立公文書館憲政資料室蔵GHQ/SCAP文書・米国民政府史料USCAR文書、立命館蔵GHQ/SCAP文書データベース、沖縄県公文書館USCAR文書データベース)の渉猟を通じて戦争の死者に関わる問題領域を発見し、ここで得た事例を地方公文書館での県庁文書史料とつきあわせ、相互のズレと解明作業を進めるものである。またテキスト分析にあたっては思想史手法によってテキストを文脈において読む作業を進めてきた。この結果、米軍資料(本土占領のSCAP/GHQデータベース及び沖縄占領のUSCARのDB)中のキー

ワード、War Victim、War Deadに関わる案件の重要性とともに、外務省外交史料館を含め、日本の府県単位での公文書館の史料調査や自治体刊行資料とつきあわせ、戦争死者をめぐる理解の違い、「事件」の語られ方のズレと異同という問題領域を明らかにすることができた。

(2) 戦争死者一般からさらに問題を深め、空襲死者の問題系という新たな領域も発見できた。空襲研究は市民運動をはじめ異なる領域で研究蓄積があり、他方、戦争死者をもっぱらアカデミックに論じてきた研究史は、地域の郷土部隊を中心とした兵士研究である。しかし占領期の一次史料とそこから可能な新たな事実及びその言説分析においては、両者は重なりあい、密接に関係する問題系であったことがわかった。また戦後65年を経て、改めて空襲死者の扱いについて、新たな社会的関心が高まっており、学会でのコメントや総括を求められるほか(歴史学研究会大会の現代史部会報告での、空襲研究ほか、戦争の記憶を扱った大会報告に対する記録と批判-「大会報告批判 山本唯人・ポスト冷戦における東京大空襲と「記憶」の空間をめぐる政治、飯島みどり 抵抗の記憶」『歴史学研究』874号)、戦後生まれの新聞記者からの取材に応じることが増え、社会に研究の成果を還元する機会となった。東京空襲死者については調査と発表論文の成果の一部が新聞記事に掲載された(「東京空襲、日本が遺骨合葬を米に提案」『東京新聞』朝刊、2009.3/8)。また神戸空襲について、兵庫図書館が委託所蔵している神戸空襲についての原史料及び記録の整

理及びDB化作業については取材を受け、社会面での記事となった(「神戸大空襲資料をデータベース化」『神戸新聞』、2008. 8/6)。

(3) 沖縄地域については1950年代以降、1970年代に至る「摩文仁丘」形成の経緯と本土からの戦跡巡礼をめぐって、設置経緯に関わる米軍USCAR、日本本土GHQ/SCAP、日本政府関係(外務省管轄CLO史料及び南方連絡事務局関係史料、琉球政府援護課史料)の収集・整理を進め、特に1970年代前後については「復帰前」での本土府県側の動向に着目し、府県行政史料及び都道府県レベルで設置された沖縄戦モニュメント設置と遺族巡礼記録の刊行資料収集を行なった。沖縄の戦争死者認識についての実証研究は、国際的な学会でも関心が持たれ、立命館で行われた戦争の記憶をめぐる日韓の国際シンポジウムでの報告(『立命館言語文化研究』20(3)に特集、発表原稿を元にした論考を掲載)や、韓国ソウル市漢陽大学校での国際シンポジウム(主催:漢陽大学校比較史比較文化研究所、2008. 11/14)での報告などの成果となった。

3. 現在までの達成度

①当初の計画以上に進展している。

理由 史料的な有効性を確認できたことが一つである。占領軍の英語史料と地域の行政文書は相互に関わりながらズレもあり、問題領域を抽出するために有効な材料となった。「軍国主義解体」という占領政策の方針に一般化されがちな占領期像を戦争の記憶という射程から様々に議論できる多くの事実や占領期像の読み直しに有効である。第二に、空襲研究を占領期の行政史料に注目することで、新しい問題領域として提起できた。議論しつくされてきた感のあった空襲研究の成果を生かしつつ、占領期という新しい問題領域が提起できた。第三に、国際シンポジウムを含む、発表や報告の機会を多く得ることができ、未発表論文を含む3部構成、8章立てでの単著をすすめることができた。最終年度内に刊行予定である(『占領空間と戦争の記憶』有志舎、校正済、近刊予定)

4. 今後の研究の推進方策

①空襲に関わる調査や言説、問題群が戦争の記憶と占領期を考えるうえで重要な位置をしめることが明らかになってきたため、改めて占領期の米軍の爆撃調査報告書の原文につい

ても検討および史料収集をはじめ、最終年度の報告書作成に向けて作業を進めている。また空襲研究は英語圏で進んでいるため、その文献調査も進める。

②占領期像の読み直しによって、戦後思想史像がどのように再提起できるのか、あらためて考察を進める。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 長志珠絵「<過去>を消費する(『思想』1042号, 94-120頁, 2011. 2月号) 査読あり
- ② 長志珠絵「空襲研究」から考える(『日本思想史研究会会報』27, 2010. 4, 1-11頁) 査読あり
- ③ 長志珠絵「占領期のマスキュリティ」(国際シンポジウム特集号『立命館大学言語文化研究』20-3, 79-87頁, 2009. 2) 査読あり

[学会発表] (計3件)

- ① 長志珠絵「帝国の歴史学とポストコロニアルの課題」日本思想史学会大会報告(於東北大学, 2009. 10. 17) 空間と戦争の記憶・ポスト
- ② 長志珠絵、戦争の記憶をめぐる国際シンポジウム(於韓国ソウル市漢陽大学校、主催:漢陽大学校比較史比較文化研究所、2008. 11/14)
- ③ 長志珠絵「占領空間と戦争の記憶」(立命館大学言語文化研究所主催、国際シンポジウム、2007. 10. 22-24)

[図書] (計1件)

- ① 長志珠絵『占領空間と戦争の記憶』有志舎、校正済、近刊予定